

空き家 移住促す財産に



人口減が進み、治安面からも懸念材料になりつつある空き家の増加。この問題に取り組みNPO法人「住まい安心サポート秋田」(秋田市)で理事長を務める。「増え続ければ地域の活力は失われる。負の遺産を地域の財産にしたい」。マイナスをプラスに転じ、空き家から新たな活力を生み出すことをめざす。

NPOは、町内会長や1級建築士、宅地建物取引士ら30〜70代の15人で昨年つくった。相続問題など空き家の持ち主側の貸せない理由に耳を傾けて糸口を探り、借りたい人の要望も聞いて、双方を結び付ける。「どん

「住まい安心サポート秋田」理事長 佐々木 義文さん(65)



見守り隊の結成式後、「周りの人に配って」とNPOのパンフレットを配る＝16日、秋田市広面

ささき・よしふみ 旧河辺町(現秋田市)生まれ。大学卒業後、秋田市の大規模小売店に就職。30歳で転職し、県商工会連合会の事務局長などを務めた。NPOへの相談・問い合わせは事務局(018・8338・4720)へ。

な相談にも乗ります」。無料。空き地の利活用にも知恵を絞る。

地方の空き家の価値に目を開かされた出会いが、60歳から3年間務めた河辺雄和商工会(同)の事務局長時代にあった。

「アトリエに絶好の場所ですよ」。商工会の企画で移住を検討していた写真家が、視察で見た空き家の車庫を指さして言った。「この田んぼ、山、水。素晴らしいじゃないですか」。創作に最適だというのだ。都心でマンション暮らしだった

た写真家はその後、家族4人で移住してきた。2人の息子は2階のある一軒家に大喜びし、地域住民との交流も進む。「周りに刺激と元気を与え、まちの元気が上昇しました」

作業で音が出る彫刻家や煙の出る陶芸家、山を見たい画家も移住してきた。自分たちには当たり前前に見えた風景と、便利とは言えない古い空き家。「ただ、芸術家らにとっては魅力があった。私たちは家に利便性や機能性を求めていたが、それが

ない空き家にも利活用方法がある。空き家の所有者から借り手への橋渡しの実績はまだ1件だが、相談活動の積み上げから移住の実現を図る。併せて、他のNPOとの連携も進める方針。「まちを良くしたい」との思いを共有するNPOのネットワークが、行政には手の届かない「子育て相談」などの機能を發揮することで、移住先としての魅力が増すと考えるからだ。「秋田にいらっしやい」って

たんです

16日には、NPOの実動部隊として、ボランティアが隊員となる「住まい安心見守り隊」の結成式があった。隊員は、通勤や買い物途中などの日常で、地域の空き家が壊れていないか見守ったり、家の将来に不安がある住民をNPOに紹介したりする。

「秋田にいらっしやい」って(斎藤茂洋)